

## 令和2（2020）年度 第1回柏崎市食育推進会議 議事録（概要）

**開催日時** 令和2（2020）年10月30日（金）13：30～15：00

**会場** 柏崎市元気館 きりん

**出席委員** 井倉委員、井比委員、今井委員、岡嶋委員、近藤委員、新澤委員、鈴木委員、高德委員、高橋委員、布施委員、星野委員、若林委員 12人（五十音順）

**事務局** 柴野福祉保健部長、品田健康推進課長、坪谷健康推進課課長代理、竹内地域保健係長、曾田健康増進係長、相沢主任、金子主任、佐藤主査、神田主任

### 概要

令和元（2019）年度及び令和2（2020）年度の事業内容と目標値の進捗状況を報告し、令和3（2021）年度以降の重点課題と取組について委員より意見を伺った。

#### 1 開会

#### 2 委嘱状交付

#### 3 委員紹介

#### 4 福祉保健部長挨拶

今年は新型コロナウイルス感染症の関係で季節感がない中で、4月から委員の皆様も改選され、新たにスタートをきったわけだが、会議の開催が10月になってしまい、皆様にはご迷惑をおかけする。

食育という言葉が一般的に広く使われるようになって久しくなった。最近ではいろんな食に関係するようなこと、例えば、孤食であったりとか、子ども食堂であったりとか、あるいはこの計画でも大きなテーマである地産地消など、いろいろな意味で食に関する生活における食の重要性ということは広く、国民、市民にも行き渡っていることは認識している。ただし、実態として、それが柏崎市民にとって、良い方向に進んでいるのかどうかというのは、本当に重要なことでありながら、見過ごされがちな面も多々あるのではないかと考えている。そして、そこを良い方向にもっていくためのアプローチの仕方というのが、非常に多岐にわたっている。私どもが直接行政で主管しているのが福祉保健医療の分野だが、これだけではやはり適切な形で方向性を定めていくことが難しい。そういった意味で今回お集まりいただいている方々の中で、いわゆる食の流通等にかかわっている方、学校教育分野にかかわっている方など、多方面からのアプローチが必要になってくると私どもとしては認識している。このような中で、市民の健康を守っていくという重要な使命に向けて、皆様から知識やいろいろな部分でアドバイスをいただいて、良い方向にもっていきたいと考えている。本日は忌憚のないご意見を賜りたい。

#### 5 会長・副会長選任

委員の互選により、会長に岡嶋委員、副会長に鈴木委員が選任された。

#### 6 議事

- (1) 令和元（2019）年度及び令和2（2020）年度の事業内容と令和元（2019）年度の取組結果について <資料1、2、3-1、3-2、4>

事務局が説明

(2) 令和3（2021）年度以降の重点課題と取組について <資料5、6>

事務局が説明

会 長 さきほど、事務局から説明があった今後の重点課題と取組について、委員の皆様からご意見をいただきたい。本日欠席のL委員からは、配付された資料7のとおり、取組に対するご意見を事前にいただいている。皆さまからもご意見をお願いしたい。

会 長 今後の取組として、学校での取組があげられていたが、A委員いかがか。

A委員 私が所属している中学校では、年に2回、健康生活強調週間というものを行っており、同じ学区の小学校と一緒に取組を行っている。その中で課題になっているのが、メディア時間の管理ができない生徒が多く、それに伴って、朝が起きられない、朝ごはんは食べてくるけれども、質がよくないという生徒が見受けられる。強調週間の間は、生徒の健康委員会を中心に呼びかけを行い、啓発活動を行っている。また、昨年度は学校保健委員会でも保護者と学校職員が話し合いを行い、朝起きてしっかり朝ごはんを食べられるような活動を年間通して行っている。

肥満について当校では、今年度は昨年度より肥満の生徒の割合は少なくなっている。ただ各学年に1人くらい40%を超えるような生徒もいるので、そういう生徒については、養護教諭を中心に個別に指導を行ったり、本人だけではなく、個別面談の時に担任から保護者に話をしたりしている。現在では受診が必要な生徒が多くいるわけではないので、肥満の取組は行っていない。

会 長 高校生に向けた効果的な取組方法などについてB委員いかがか。

B委員 朝食について本校の場合は、食べていない生徒は5%くらいで、とれない生徒にはいろいろな事情があり、それに関しては担任と養護教諭で個別の対応をしている。

肥満については、高校生になってから運動不足になり、中には肥満が進行する生徒がいる。逆に心配なのは、やせすぎや摂食障害などもあり、そういった個別のものについては進行しないように指導している。

高校の場合は、事業を立ち上げることは難しいが、教科指導が保健、家庭科等、かなり充実した内容になっていて、その教科の中で生徒の実態に応じた工夫、養護教諭と担任を中心とした個別指導の継続が必要であると考えている。

新たに高校での可能性として考えていることが2つある。1つは、探究の時間における食に関する地域との連携である。高校で年間35時間、総合的な学習時間があるが、現在の2年生から探究の時間を設けて、個人及び数人のグループで自分たちの関心のあるテーマについて調査、研究、発表をしている。その中には、食や健康に関するテーマが多くあり、例えば、栄養バランスチェック

法、偏りがちな栄養素、発酵食品、和食、食品ロスなどのテーマを設けて、生徒が活動している。単に調べ学習ではなく、研究的な手法を学びながら、地域の専門家や当事者へのアンケートやインタビュー等の計画を進めてきたが、今年度はコロナ禍で、なかなかフィールドワークやインタビューなどは出来ずに活動が限定的になってしまった。探究の中で、食に関わる行政の方や地域の方から学び、それを発表という形で他の生徒への啓発が出来るのではないかと考えている。実業高校では、そういった取組が今までであったわけだが、普通高校でもこのような活動が必要になってきている。

2つめは、高校生の地域活動への参画の推進を考えている。大学入試の改革に伴って、調査書や推薦書の形式が変わってきている。今までの学科試験中心から在学中の活動で、どれだけ主体的、協働的に活動したかも評価対象となり、その中にボランティアやコミュニケーション活動、探究の活動での実績がある。食に関する地域の活動に関わる高校生が増える可能性があると思うので、地域の活動をされている方たちへ協力とお願いができればと思っている。

私が日頃から考えていることは、高校生は地域とのつながりがとりづらい年代ではあるが、機会さえあれば、生徒たちはいろんなことを考えることができる。県内でも実業高校や部活動などで高校生のアイデアが採用されたり、企画やイベント、商品開発などもしている。食育など行政の計画の中でも、直接当事者である高校生から意見を聞く場や企画段階から高校生が入るような活動があると、高校生にも当事者意識が芽生えていくのではないかと思う。食のアプリ作成や地域の店舗を巻き込んだ朝食のキャンペーン、商品の啓発など、生徒を巻き込んだ活動ができればいいなと個人的に考えているところである。

会 長 保育園の保護者に対する効果的な働きかけなどについてC委員いかがか。

C委員 重点課題にある生活リズム、早寝・早起き・朝ごはんというのは、乳幼児期の基礎となる大切なことである。保育園としては、基礎となる部分を確立できるように保護者に発信しているところであるが、各家庭それぞれの形態がある中で、なかなか思うようにいかないのが現実である。

生活リズムでは、お腹がすくような活動で食べたい、おいしいというリズムももてるようにしている。その中で、保育園として保護者に「食べさせてね」というお願いばかりしていると、保護者がストレスに感じてしまい、なかなか信頼関係がつかれない場合がある。たまたま当園では、全クラスで午前中にスキムミルクを飲む時間がある。朝食をとって来ないお子さんもいる中で、午前中に何もお腹に入れないで活動するのではなく、朝ごはんの代わりとなるものをもって活動している。

私が考える園で出来ることとしては、必ず子どもと一緒に先生も食事をとることである。忙しいけれど一緒に食べ、会話も楽しむという、食に対する楽しみという気持ちを育てることが大切だと思っている。まずは身近な大人が食への興味をもち、食を楽しむ姿を見せて一緒に食べると、子どもも楽しみながら食べられると思う。また、スマートフォンを見ながら会話もなく食べるといったさみしい食事にならないように保護者に呼び掛けていきたい。保護者に向けての発信もそうだが、やはり受け止めてくれる保護者との信頼関係なしでは、言葉を受け止めていただけないので、日頃から保護者との信頼関係を十分にとって、その上で発信をして、話を聞いてもらえるという関係でいたいと思う。

子どもたちに向けても、トウモロコシの皮をむく、枝豆をとる、芋ほりなどの食育活動を通して、食に関心をもってもらうようにしている。小さい頃の経験はとても大切だと思うので、これからも進めていきたい。

会 長 働き世代への効果的な啓発方法など、D委員いかがか。

D委員 現在、在宅保健師として、市の国民健康保険の特定保健指導と事業所の保険者の協会けんぽの委託を受けて、中小企業の従業員の特定保健指導を行っている。

協会けんぽでも働き世代のデータがあり、分析している。新潟支部としての分析になるため、柏崎の特徴というのはなかなか出にくいですが、朝食を欠食している人は20%、夕食時間が遅い人は25～32%、早食い傾向の人は32%であった。分析では、早食いはメタボリックシンドロームにかなり影響しており、重要だと再確認されてきている。また、睡眠不足の人も40%いる。睡眠を疎かにして、夜遅くまで起き、朝ぎりぎりに起きることが朝食欠食につながると思うし、午前中の仕事にも影響している。改めて、生活のリズムが大きい影響を与えるという点を保健師同士で申し合わせながら、保健指導を行っている。

重点課題に関することでは、対面している人のその場面だけでなく、その人が家に帰ってどんな生活をしているのかということも聞いている。例えばお子さんが小学生の場合、「お子さんは朝ごはん食べているの」と聞くと、「学校から言われているから食べている。奥さんと子どもは食べているが、自分は食べないで新聞を読んでいる」という返答がある。その際は「子どもさんは、今は朝食を食べているけれども、大きくなったらお父さんのように、食べなくてもよいのだなと思っ

ているかもしれませんね」ということなどを話題提供し、視野を広げていただいて、自分の存在がどういうふうに映るのかということを含めながら、保健指導の場面を使って、今出来る立場で食育の連鎖の一つだということ意識している。また、その人が会社の中で重要な役割をされているとしたら、他の職員への波及効果も視野に話をさせていただくと、それぞれの立場で感じられることがあるようなので、それも一つの視点として働きかけている。職場で一人変わると周りも影響を受けるということがあるので、モデルとなる成功事例をつくるということも大事だと思っている。

朝食については、時間がない、中学時代から食べていないので慣れている、たまに食べると体調がおかしいなど、朝食を食べない習慣はなかなか変えられない。朝食は大事だという本当の意味合いを体の仕組みから説明すると、今直面している健康問題を解決するためにも朝食摂取は重要と考

えてもらえるようだ。その上で「ちょっとでも食べた方がいいのか、完璧でなくてもいいのか」ということが理解されると、少しずつ努力される人がいるようだ。1週間のうち0だったのが、半分くらい食べられていますねと評価しながら進めている。朝は時間がないと言う人には、通勤途中でも可能で、車の中で片手で食べられるものだったらいいとか、コンビニエンスストアで調達して、デスクで食べるだけだったらいいとか、家庭の中で団らんがあって、みんなというレベルには遠い存在の人たちでも、朝食の最低限の要素を体に取り入れていただけるように、その人の生活ペースに合わせてアドバイスしている。

ることと併せて、今悩んでいるメタボリックシンドロームや健診データの影響を関係づけていくことも、私どもの役目だと思っている。また、歯科医院の先生からも声をかけていただくといいのではないかと考えている。

会 長 今後の取組について、効果的な啓発方法などE委員いかがか。

E委員 いろいろな世代の方と関わる中で、食に対する疑問について正しい情報をキャッチすることが出来ていないと感じる。いろいろな情報が溢れている時代背景もあるが、小さな食の問題を抱えていたとしても、それをどこに問い合わせたらいいのかというところで、迷子になられている方がとても多いように感じている。食事や肥満について、いろいろなところ、例えばスーパーなどとタイアップしたり、連携をとったりして、簡単な朝食の作り方やどうしたら正しい食生活に取り組みめるのかなど、身近に市民の方たちが正しい情報を得られる場があったらよいと感じている。

それぞれの皆さんがいろいろなところでさまざまな取組をされていて、いろんな情報をお持ちだと思う。その情報がなかなか下の方まで降りてこない状況にあると思うので、取組を通じて発信していただけるとありがたい。それぞれの専門の方のご意見をいただきながら連携して事業を行うことが大切だと思う。コロナ禍で生活様式も変わってきている世の中なので、今までと違う斬新な取組もあっていいと思うので、いろいろな形で連携して何かをしていくということが大事ではないかと感じている。

会 長 若い世代だけではなく、高齢者も含めて効果的な取組方法について、F委員いかがか。

F委員 地域の中で感じていることとして、朝食は保育園、小中学校でそれぞれ指導されているし、三世代で同居している家庭では、朝食をしっかり食べているように思う。高校生から上の年代になると、ぎりぎりに起きて時間がないから食べないで出かけてしまうということをよく聞く。最近、高齢者世帯では、朝早く起きると、これからの季節は燃料がかかるので、朝遅くまで寝て、朝食と昼食を一緒にとっているということも聞く。先日、地域のサロンの際に、早寝・早起き・朝ごはんという話をしたら、「ここにいる人は朝早く起きているし、早起きをして動けば、お腹がすくから食べないでなんかいられない」と全員の方が言っていた。今後もこのような機会があるたびに伝えていきたい。

J A女性部の活動で、地場産の新鮮な食材を使った郷土料理を親子で学ぶという活動を行っているが、今年は調理実習が出来なかったため、屋外で出来る活動として、さつまいも堀りをした。掘るのみで、食べることはしなかったが、つるをひきながら芋をとることに大喜びだった。また、これからの秋の味覚や食べ物の話をクイズ形式でしたら、親子でとても盛り上がり楽しんでもらった。

塩分については、最近どこの家庭でも薄味になっている。食生活改善推進員でもコミュニティセンター等で啓発していただいているので、薄味になってきているのではないかと考える。また、食事をワンプレートに盛りつけると、栄養バランスを確認できるという話もしている。

肥満予防については、3食しっかりとらないと、昼食、夕食の30分～1時間前にお腹がすいて、

間食をとりたくなる。そこで間食を食べすぎてしまうと、大事な食事がしっかりとれないということも聞く。ほかには運動も大切だと思う。地域でコツコツ貯筋体操を行っているが、皆が休まないで出席していることを喜んでいる。終了後に、野菜の調理方法などをみんなで話したりすることも楽しみにしている。今後もサロン等の場でいろいろな啓発を行っていきたい。

会 長 朝食の摂取に向けた取組など、G委員いかがか。

G委員 子どもが栄養のことを考えるのはなかなか難しいことだと思う。また、保護者への指導やどこまで介入したらよいのかなども難しい問題だと思った。子育てをしている時は、皆が一生懸命で、忙しい中、栄養のことを考えたり、朝ごはんを食べない子どもに食べさせたりするのは、なかなか難しいところがあると思う。お母さん同士の話の中では、「学校給食にすごく期待をしている。そこで栄養をなんとかとってもらいたい」、「普段は栄養バランスをなかなか考えられないので、とにかく学校に行って給食さえ食べてもらえれば、何とか栄養を保てるのではないか」ということを聞く。

今年は、新型コロナウイルス感染症で学校が長期間休みになったりして、普段の夏休みもそうだが、そういう時に栄養バランスが崩れていくのではないかと考えている保護者も多いと感じる。その方たちへ何か教えることができたらと思う。昨年、学校でスポーツと栄養の講演会があったが、平日の開催だったため、参加した保護者はごく一部しかいなかった。行きたい気持ちはあっても仕事で参加できないなどいろいろあると思うが、今日の話を知っていると、なおさらどのように進められるのかと逆に悩んでしまう。

私は乾物屋を営んでおり、小学5年生でご飯とみそ汁を作る調理実習があるということで、3年前から煮干しとだし昆布のだしをそのまま飲んでもらうという体験を行っている。個人的に取り入れてもらえる学校に行き、クラスごとに話をさせてもらって、だしを飲んでもらい、煮干しとだし昆布を持って帰ってもらっている。その際に「お家の方と一緒にだしをとって、今日の話をしてね」と伝えている。実際に家庭で実践したかどうかはわからないが、今後、地場産の食材を使って食事を作るとか栄養を考えると何かのきっかけにつながればいいなと思いながら取り組んでいる。

会 長 保育園や学校の保護者に対する効果的な働きかけなどについて、H委員いかがか。

H委員 朝ごはんを食べた方がいいのは、みんなが知っていると思う。肥満が体によくないこともみんなが知っている。なぜそれがうまくいかないかということ、社会全体の問題なので、ここで言ったことがすぐにぱっと実現できる、ぱっと変わるということは、まずないと思う。社会全体が自分のことに対して気を配ることが、時間だったり、精神的な余裕だったり、あまりにもなさすぎると思う。同級生の話を聞くと、夜9時10時まで働いて、家に帰ってお風呂に入って、それから夕飯を食べて、ゲームをしたり、テレビを見たりしてから寝ているという。それでは朝は起きられないし、お腹がすくわけがない。そういう人たちに朝ごはん食べましょうとかこういうのがいいですよと言っても、やるわけがないと思う。もちろん食育という事でのアプローチは大事だし、それぞれが専門の中でやっていかなければならないし、諦めてはいけないと思うが、そこだけやってもたぶんうまくいかないのではないかと今日の話を知っていて思った。みんながちょうどいい時間帯に夕

飯が食べられて、そこからちょっと一息ついて、寝て、次の日の朝にちゃんと起きられて、その時にはちゃんとお腹がすいていて、今日の朝ごはんは何を食べようかなと思いながら起きるといような生活リズムを、どうやったら社会全体で作れるかというところにもアプローチしていかないといけない。何を食べましょう、これを食べましょう、こうやれば簡単に出来ますよというのは大事なノウハウだが、根本の何でうまくいかないのかというところに働きかけないと、せっかく情熱をもって取り組んでも結果がつきにくく、もったいないと思った。でもそれは本当に難しいし、すぐには結果が出ないと思うが、やっぱり外せないことだと思う。

会 長 今後の取組に期待することなど、I委員いかがか。

I委員 昔は三世代家族で、おじいさんとおばあさんの目があって、お父さんとお母さんがそこを気にしながら子どもを見ているという形をとっていたと思う。子どももおじいさんたちとお父さんたちの2つの姿を見て育つ。だから社会常識とか一般常識とかがついてきていると思うが、今は2世代家族が多く、子どもはお父さん、お母さんを見て育つ。極端な言い方だが、例えばお父さんがお風呂上がり裸で家の中を歩いていたら、それが当たり前だと子どもは思うが、おじいさんやおばあさんがいれば、お父さんは気にしてしないということにつながる。例えばご飯も昔は、主菜があって、副菜があって、香の物があって、ご飯とみそ汁があってというのが当たり前だったのに、今はそれが崩れている。またそれを教えてくれる人もいない。崩れたものをいかに補正していくかがまず一つかと思う。こちらの目線で考えていくのではなく、肥満の方や朝食を欠食する人に何で欠食をするのかを聞いて集計すると、その当事者が思っている問題点があるから、その問題点を絞って解決していけば、ある程度よくなるのではないかと思う。説得して納得させるのはとても難しいことだと思うので、当事者に問題点をあげてもらい、その問題点をまとめ、傾向を把握して、社会や家庭で補正していくことがよいと思う。

会 長 今後の取組に期待することなど、J委員いかがか。

J委員 成長段階の部分では、C委員が言われていたように、食自体の楽しみというのを学ぶということは本当に大切なことだと改めて思った。その上で、小学校、中学校で健康習慣のような取組をされているが、ある程度知識がある人たちには、自分を点検するという機会があるとよい。今回の市の取組の中でも、肥満度20%以上の啓発方法がなかなか難しいということであったが、啓発する時に、その個人が自分で気づくという形をとれば全体としてアプローチが出来るので、自己点検チェックリストなどで、そこからどういうふうに習慣を改めたらいいかといったようなところに取り組むことも一つだと思う。点検があるとそれを基にして、保護者へのアプローチが出来ると思う。さらに大人の世代だとH委員が言われていたように、朝食をとった方がよいことを誰もがわかっているのは、まさにその通りで、E委員が言われていた知識として正しい情報をキャッチということは、さらに高いレベルではあると思うが、朝ごはんを食べた方がよいことはほぼ多くの方が認識されていること。ただそれが現実には出来ていないことを改善させるためには、D委員が言われていたように、最低限なことでも出来るようにという視点は非常に大切だと思う。崩れている人

たちには、少しでも一つでも階段を上ってもらえればというようなアプローチは必要だと思った。地域振興局としても食生活改善推進員協議会や関係団体、市と連携して一緒に進めていきたい。

会 長 今後の取組について、効果的な啓発方法など、K委員いかがか。

K委員 大学で教員をしているが、健康栄養学科の学生でも煮干しでだしをとったことがない、家庭にめんつゆはあるが生醤油がない、砂糖、しょうゆ、みりんなどを調合して味をつけることを知らないという学生もいる。衝撃を受けるが、家庭でそういうふうで育ってきた、経験がないという背景がある。また、学生と話をしていると、どこの地域で生まれ育ったかによって、どういう食育を受けてきたかが違うということを感じる。どういうふうに学んできたか、どういう体験をしてきたかで全く違うということを感じている。

重点課題の朝食については、子どもや親世代の問題と認識していたが、今日は高齢者にも問題があるということを知った。また、肥満だけではなく、やせも問題もあるということも知った。この大きな二つの問題というのは、全世代的な課題であって、まず家族ぐるみでということだが、その力がだんだん弱まってきているので、地域でなんとかしていこうというのがこの会議のかなと思う。朝食の欠食の問題は、全国的にも改善せず、こうやればよくなるという特効薬がない状況で、それぞれが知恵を絞ってやっている。以前、高校生の朝食の調査をしたところ、欠食率は1割くらいであったが、何を食べているかと聞いたところ、主食・主菜・副菜がそろっている生徒は15%くらいで、半数は何か1品でパンだけなどの単品であった。朝食欠食のアプローチは、I委員が言うように実態把握が必要だと思う。学校の栄養士が生徒に朝食の話をする時に、子どもたちが何を食べているのかわからない上で話すのと、わかって話すのでは、全く伝わり方が違うし、アプローチも違う。現在は、朝食を食べてきたかどうかを聞くこと自体がプライバシーの問題で、それを聞きにくい環境にあることも聞く。子どもたちは子どもたちなりに力をもっているので、家で朝食が用意されていなくても、自分で簡単なものを作って食べようという力を育てていくことも大事だと思う。そういった意味で、朝食の話をする機会が増えることはいいことだと思う。併せて、調理する、直接体験するという機会をできるだけ地域の中で増やしていただければと思う。ただコロナ禍なので大人数の実習は難しいが、少人数を対象に短時間で出来るようなことをするのもいいのではないかなと思う。

肥満については、ハイリスクの方だけを対象とするのは非常に難しくなっており、やせの方も問題。自分の適正体重がどのくらいかわかるという教育をしていくことが何よりも重要である。J委員が言われたように、まず自分の健康は自分で守る、自分で気づくということが大切である。小学生であれば、成長曲線を自分で書くことで自分の状況がわかるので、そういうことも重要だと思う。管理栄養士にお願いしたいことは、計画の目標項目に自分の必要なエネルギー量を知っている人の増加というのがあったが、割合が高くない。国から示されている食事摂取基準をいかにわかりやすく伝えていくことが管理栄養士の仕事としてあると思うので、給食という教材を使いながら伝えていただきたい。減塩の事も問題になっているが、肥満の場合、量を食べるので、食塩摂取量が多くなったり、朝食欠食もあつたりするので、それぞれ単体ではなく、セットで発信できるとよいと感じた。



会 長 食生活改善推進員としても、コロナ禍で人を集めて講話をしたり調理実習をしたりが出来ない状況にあるが、先日、地域振興局健康福祉部の食育事業で高校生を対象に講話を行った。先生から、今の生徒たちは、主食・主菜・副菜の意味がわからないので、それをテーマにしてほしいとのことであった。その際にとったアンケートでは、朝食はほとんどの生徒が食べていたが、内容はパンと牛乳のみなど、栄養バランスが整っていない傾向にあった。また、遅くまで部活をして、それから夕食を食べて、夜遅く寝てという生活リズムの乱れもみられる。それがよくないということを子ども達もわかっているが、出来ない実態があることも事実。講話では、昼食のお弁当の適量を折り紙で作成したものを示したが、それがとてもわかりやすかったという意見をいただいた。先生からは高校生は資料をもらってもその時だけだが、実際に目で見たり、触れたりするととても興味を示すということを知った。また、バランスよく食べるときれいに痩せられる、ただ食べなければスタイルがよくなるというわけではなく、きちんとバランスよく食べるからこそ体の中からきれいになっていくということをお話したら、女の子は目を輝かせながら、とてもよく聞いてくれた。

高齢者については、欠食なく食べているが偏った食べ方をしている。野菜はとっているがたんぱく質不足の傾向にある。食育は各年代によって、語り掛ける内容が違うことを改めて実感している。

会 長 全体を通して、質問、意見はないか。  
(質問、意見なし)

会 長 これで議事を終了とする。

7. その他  
(なし)

8. 閉会挨拶 (健康推進課長)

長時間にわたり貴重なご意見をいただき感謝申し上げます。以上をもって第1回食育推進会議を閉会とする。